

昭和初めの「プロレタリア文学」に抜群の才能を發揮した葉山嘉樹の晩年のエッセー、「増産戦」(四百字詰め原稿用紙九枚)が、一九四三年十月二十一、二十二日の「満州日日新聞」に掲載されていた。彼の日記にタイトルと掲載紙の記録が残っていたが、発表日が特定できなかった。

その紙面には、また対米英戦争の勝ち戦に乗じた記事が躍っている。葉山のエッセーは、開拓民たちの軽い調子の会話にはじまるが、栄養状態も悪く、医療も行きとこなないことを告げてゆく。「増産戦」とは、祖国に食糧を送るための銃後の戦いである。病

九三六年に本格化した。だが、同じ年にはじまる「満州国」第一次五カ年計画は、重化学工業を育てることが中心で、農業は捨ておかれた。日本が対米英戦争に突入するや、「満州国」は、その兵站食糧基地へと意味を変え、「大東亜共栄圏の模範たれ」というスローガンの下で、中国人、朝鮮人村落に一定のテコ入れがなされた。が、日本人の開拓村に手が打たれた形跡はない。

# 「満州国」の実情映す 葉山嘉樹のエッセー



鈴木 貞美

た。満州研究の老大家、呂元明氏(八十五歳、長春市在住)が、今年の三月はじめ、「満州小事典」編集に向けた国際シンポジウムのため、京都の国際日本文化研究センターを訪れた際に、届けてくれ

に倒れて、帰国するまで農作業に精を出す若い娘たちのけなげな姿も書いてある。  
中国東北は、二十世紀はじめに、国際マーケットに大豆を供給する地域に変貌し、周辺や朝鮮から人口流入が起った。日露戦争にかろうじて勝った日本が「満鉄」沿線を開発、関東軍が一九三二年以降、実質的な支配下においたことはよく知られる。  
日本からの開拓移民は、一

葉山嘉樹は、転向後、電力国有化や切符制の配給など、「内地」の総力戦体制に、平等の徹底、社会主義の実現を見ていた。だが、この「増産戦」は、彼が底辺の者たちと生きよつとする姿勢まで失ったわけではないことを告げている。葉山は、開拓村に移住し、一九四五年十月、引き揚げの汽車のなかで、脳出血で亡くなる。

今度のシンポジウムで、呂元明氏は「満州国」の開発のため、「勤勞奉仕」に駆り出され、自分のからだに後遺症があること、一九四四年には、中国人の若者が大量に戦争地帯に送られ、帰ってこなかったことを語った。

今年(一九四四年)は満州事変八十年にあたる。日本が中国大陸で行ったことの一部始終、その裏表を、よく見通す機会にした

い。  
(すずき・さだみ)国際日本文化研究センター教授、人間文化研究機構による日本関連在外資料調査研究事業・近代を統括する)